

日本での経験を生かしてキャリア設計

リーッカ・ランシサルミ *Riikka Länsisalmi*

ライデン大学日韓研究所准教授

オランダのライデン大学で日本語教育に携わるランシサルミさん。日本学は学生に人気があるという。民博での経験が現在の仕事に役立っていると流暢な日本語で語ってくれた。

偶然に学び始めた日本語

日本語との出会いはヘルシンキ大学に入ってからです。外国語専攻でフランス語を学びながら、他の言語も勉強したいと思っていたところ、自分のスケジュールに合ったのが日本語でした。ですから、日本語を学び始めたのは偶然だったのですが、国際交流基金から派遣された先生のおかげで、4年間とても楽しい語学の授業を受けることができました。

ヘルシンキ大学に在籍中に、2週間の研修ではじめて来日しました。そして1990年、今度は民間の財団の奨学金を受けて、大阪外語大学で半年間学ぶことができました。さらに、ヘルシンキ大学で修士論文を書きあげた後、文部省の奨学金で国立民族学博物館（民博）に来まし

た。大学の先生が民博の庄司博史先生（民族社会研究部）を紹介してくれたのです。

奨学金がもらえる期間は1年半だったので、このまま帰ったら何も残らないと思い、総研大に入学し博士課程に進学することにしました。研究テーマは「Overt First and Second Person-Designating Terms in Japanese Discourse（日本語における一・二人称詞用法の語用論・談話分析的研究）」です。簡単に説明すると、日本語では話をする相手によって人称が変わりますが、どのような時にどの人称が使われるのか、今まであまり体系的に整理されていませんでした。これでは日本語を学ぶ人にとって不便です。それを少しでもわかりやすく、体系的に示すために研究をしてまとめました。博論を仕上げ、学位を取得した後も民博で研究員として

研究を重ね、2000年12月にフィンランドに戻りました。

フィンランドでは、ローレア（Laurea）応用化学大学で6年間、語学教育全般を任され、また、日本語に関しては初級レベルを教えていました。しかし、やはり日本語に専念しなかったのが、2007年、オランダのライデン大学に移りました。ライデン大学には欧州で最も古くから日本学の学科があり、日本語のみならず、歴史や現代社会、政治、宗教、文学などを学ぶことができます。人文学部には27の学科があり、そのうちの一つが日本学ですが、歴史に次いで大きい学科です。私はここで、日本語専攻指導教員のトップとして働いており、カリキュラムを組み、科目ごとに担任を割り当てるなどのコーディネートも行っています。同時に、1年生の語学や文法の授業も担当しています。これからは、2、3年生の授業も持つことになるので、言語学的分析なども教えることになるでしょう。

人気高い日本学

日本学は学生の間で人気があります。オランダの大学は日本やフィンランドと違って、入りたい人は誰でも入れるので、自然と人数が多くなってしまいます。今でも1年生は100人以上いて、9月からは150人程度に増える見込みです。特に語学は人数が多いと教えるのがたいへんなので、クラス分けをどうしたらいいか

頭を悩ましています。また、学部レベルの語学プログラムの改善を進めているため、忙しくて自分自身の研究時間があまりとれないのが悩みのひとつです。

日本学に対する学生の関心が高いのは、やはりマンガやアニメの影響なのではないでしょうか。日本のマンガや音楽などのポップカルチャーは、インターネットですぐ見ることができますし、CDやDVDも多く売られています。日本のポップカルチャーは、米国や英国に対抗するものとして捉えられているようです。米国や英国とは違うアイデンティティを求める若者にうけているようです。もちろん、日本の歴史や文学、あるいは空手などの武道に興味を持って入学してくる学生もいます。

日本学を学んだ学生の中には、銀行や保険会社など国際的展開をしている日本の企業や、日本の政府関係機関で仕事を見つける人もいますし、図書館や旅行会社、教育関係の現場で職を得る人などさまざまです。

フィンランド人がオランダで英語を使って日本語を教える

学部レベルと違い、修士課程の学生はいろいろな国から集まってきます。オランダ人は半分くらいで、あとはドイツ、イタリアなど他の欧州の国からと、韓国、日本などアジアからです。もちろん日本人は語学の勉強をする必要はありません。今在籍している学生は旧満州国における日本語教育について研究しています。学部レベルはオランダ語と英語で授業をしますが、修士課程の授業はすべて英語で行われます。修士課程は、学部レベルで学んだことを深めるとともに、自分の関心のあるテーマを選び、より専門的な研究をします。

ライデン大学のスタッフも多様な国から来ています。私のように、フィンランド人がオランダで、英語を使って日本語を教えているというのは、めったにないケースではないでしょうか。さまざまなバックグラウンドを持つスタッフがいるのはいいのですが、合意形成がむずかしい

リーッカ・ランシサルミ
(Riikka Länsisalmi)

ヘルシンキ出身。1992年ヘルシンキ大学で文学士取得後、奨学金を得て総研大（国立民族学博物館）に留学。1998年、博士課程修了。引き続き民博で研究員として過ごした後、2001年帰国し、フィンランドのローレア応用化学大学で教える。2007年、オランダのライデン大学に移る。今後も引き続き欧州で日本学と言語学の研究を進めるとともに、日本語を教えていきたいと考えている。また同時に、常に最新の状況を把握するため、これまでより定期的に日本に来てフィールドワークを行ったり、学会などにも参加したい。大学の仕事と家庭を両立させるのはむずかしいが、4歳の娘のためにも、うまくバランスをとっていこうと心がけている。



場合もあります。たとえば、最近こんなことがありました。日蘭学会の予算から毎年2年生約20人を3か月程度日本で過ごさせるプロジェクトがあります。日本での経験は短期間でも有意義だと私は考えますが、教授の中には、その間大学の授業を休むことになるので、学生にとっていいことなのか、また、きびしい学部プログラムから短期間の例外を許すのはいかがなものか、などの意見を持つ人もいました。結局、来春約16人の学生が日本に行きますが、教授が一人同行し、特別授業を行うことで決着しました。

多様な視点が学べた民博での経験

総研大での経験は今の仕事にとっても役立っています。民博にいたので、文化人類学の視点も知ることができたのが特によかったと思います。言語の研究でフィールドワークの経験を持つ研究者もおられたので、物事を複眼的に見ることを学びました。これが、学生の論文を見る際にも役立っています。また、日本のどこにどのような資料があり、どこで入手できるのか、そして、どの専門家に話を聞けばいいのかについて民博で知るこ

ができたので、たいへん助かっています。

今は日本に来ることは少なくなってしまいましたが、私は機会があれば同級生にできるだけ会うようにしています。総研大の学生にアドバイスをするとしたら、まず、総研大のネットワークを大切にしてくださいということ。自分の分野だけでなく、他の分野の人とも連絡を取り合い、ネットワークを大切にしてください。それから、どれだけ国際的な活動に重きを置くかにもよりますが、早い段階で外国に出て、学会発表したほうがいいでしょう。そうでないと、日本の中だけの学問になってしまう恐れがあるからです。そのためには最低限の英語の能力は必要です。

また、自分の進路にどれだけ賭けるかを考えてみてください。大学のポストのみを目標にすると、人文系は狭き門で、厳しい状況にあります。将来の目標を立てるにあたり、ひとつだけでなく、第2、第3の計画も考えておいたほうがいいと思います。柔軟な考え方をすることが必要です。そのためにも、博士論文を書いている間にいろいろなことに挑戦してほしいですね。（取材・構成 村上朝子）



IIAS（アジア学国際研究所）の隣の壁に書かれている芭蕉の句。ライデン市は「詩と壁」のプロジェクトを1992年から始め、多くの建物の壁にはさまざまな詩が書かれている。